

編集後記

本号には、大学の同窓会幹事3人による「デジタルヘルスと健康長寿社会」と題する座談会記事を掲載した。昭和24(1949)年に東大医学部に入学した136人のうち2/3近くがすでに亡くなっており、多くの友人が目耳などの感覚器の故障や膝や腰の障害のため同窓会に出席できないという返事をもらっていた。自分があちら側の世界に行くのはクラスで何番目だろうか、その瞬間までは分からないなど思いつつも、後世に語り継ぐべきこともあると、思うままに語り合った座談会であった。石井威望先生などは、伊能忠敬の偉業を例に挙げ若い人とのタグを組み、今ならばAIやIoTを活用してシニアのcreativeな知恵を世のために活かすことができるとのご意見だった。高久史麿先生の、人との調和によって知らぬ間に大きな仕事を自らの力によってではなく成し遂げてこられたといったたずまいにも共感し学ぶところが多かった。世に「人生100歳時代」「ライフシフト」などと高齢者が人生を謳歌する時代だと言われる。しかし現実には今の世の中はなかなか老人には厳しいものがある。ちなみに体と頭との活性を維持するため、新しい職場にチャレンジしてみたこともあったが、せめて院長よりも若い先生が欲しかったとか、70歳代の先生がやっと東北の老健施設の施設長になったという話や、運転は危険なのでとの推奨事項などがあちらこちらからだされてくる。高齢を寿ぐスローガンを喧伝するからには、マン・マシンシステムにおいて、マシンそのものに欠陥はなくとも、故障が多くなりがちな老年者も労働・運転せざるを得ないということも考慮に入れて社会設計せねばなるまい。老人を労働や運転から排除しても、いまの若者たちがどんどん老人になってしまい、排除する者から排除される者の大群となるのではあるまいか。むしろ、ハイブリッド・カーでリアルワールドのビッグデータを収集・分析し、年齢と事故リスクの相関性、リスクとベネフィットの比較考量、さらには医療経済学的分析、これらに基づく健康政策に、期待したいところである。

そこでひねくれ者の私は、「気の利いた化け物は引っ込み時を知っている」と考えた。「ゆずり葉」という植物は時が来れば自分の立ち位置を若い葉に譲り渡す。老人の票をあてにして社会保障制度を完全にすればするほど、そんな世の中に生まれてもろくなことがないと、幼児は生まれてこないのである。飢餓状態で生活が困難なほど、出産は多くなる。自分の嫡孫が養女に授乳されている鮮烈なイメージが、川端康成に喜びとともに死へと向かう願望を抱かせたのではないだろうか。いたずらに長生きすることはいいことだという論理だけで世の中は構成されているのではない。生と死はあざなえる縄のごとく複雑に絡み合っているということが、生き延びるための論理や方策とともに私の心の深層に浮かんだのであった。

(栗原雅直)